

李登輝前總統をお迎えして

李登輝前總統来日時における各地での歓迎ぶりは、李前總統で自身が「行く先々で日の丸や緑の台湾旗、あるいは日本李登輝友の会の小旗が振られ、あるいは歓迎の横断幕が掲げられ、行き届いた歓迎をしていたのだ」と『李登輝訪日・日本国へのメッセージ』の序文で書かれているように、実に盛大だった。その一端を『李登輝訪日・日本国へのメッセージ』への寄稿文から、関係写真とともにご紹介する。

(編集部)

心の張り声の張り

作家・本会名誉会長

阿川^{あがわ}

弘之^{ひろゆき}



今年青葉の季節、李登輝前總統は来日して、「奥の細道」めぐりと、お兄様の合祀されてゐる靖国神社参拝と、かねてからの念願を二つ果されました。

靖国詣でもさうですが、「奥の細道」は出来るだけ静かに歩かれるといい、特別な関係者以外、知つても知らん顔して、のびのびと芭蕉の足跡をたどれるやうにして差し上げるのが、最も心

のこもつた歓待法だらうと、私は思つてゐました。

ところが六月七日、ホテル・オークラへ前總統の講演「二〇〇七年とその後の世界情勢」を聞きに行つてびっくりした。会場が来会者千三百人の熱気で沸き返つてゐたのです。こりや「静かな奥の細道」も静かではあり得ず、各地に歓迎の人垣が出来てゐて、八十

過ぎた前總統、その応接だけでもかなり疲労してをられるに違ひない。実はあとでちよつとお眼にかかつて、先年台湾でお世話になつた御礼を申し上げるつもりでしたが、やめることにした。それで、人目につかぬやう後の方の席に坐つて講演を聞いてゐて、又々びつくりさせられる。内容も堂々としてゐるけれど、声が堂々たる張りのある声で「お疲れの様子」なんか感じられない。それが一時間半続いて、終了後オークラの廊下でばつたり、許世楷代表と顔が合いました。許大使とは、大使が台湾自由化の青年闘士だつた頃からの古い識り合ひです。李登輝先生の控室へ挨拶に行くところだ、一緒にどうですかと仰有る。ついて行くことにしました。

控室も人でごつた返してゐましたが、李前總統は私をはつきり覚えてゐるらしく、立つたまま悠揚迫らぬ口調で二た言三言、話しかけて来られました。傍らの曾文惠夫人が、笑顔でそれ

に応じて、私の家庭のことなどお訊ねになる。このエネルギーと強靱な精神力、正確な記憶力が、自由で豊かなことにちの台湾を作り上げたのだと思ひ

ました。私の方が疲れて、レセプションの途中で会場を出てしまひましたが、まことに有意義な一日でした。

李前總統の拓殖大学訪問

本会常務理事・拓殖大学客員教授

黄 文雄



オークラ東京の講演会で語っている。特に私にとって予想外だったのは、靖国神社への参拝だった。この訪日の旅の画竜点睛ともいえよう。戦後日本の様々な事情を読んでのことだと思われるが、日本人の心と魂を守るために深思熟慮した上での参拝だと思うと、その意義は深い。

李前總統が訪日する直前に、伊藤哲夫氏と共にご自宅を訪ねたことがあった。その時は顔色が前よりも白くなっていたので、若干心配していた。だが、拓殖大学を訪れた当日、李前總統は旅

の疲れにもかかわらず血色がよく、颯爽とした姿で現れたので安心した。「奥の細道」の旅の宿願も達成したご夫婦は、他の国家元首にも見られない熱情溢れる歓迎ぶりについてホテル



成田空港で出迎える人々（5月30日）



江東区芭蕉記念館にて俳句を披露（5月31日）



第1回後藤新平賞を受賞（6月1日）

李前總統が拓殖大学本部の茗荷谷キヤンパスを訪れたのは参拝直後の昼だった。そもそも拓殖大学の前身は台湾協会学校であった。台湾語教育は創設当初から清国語、英語よりも一時間多



宮城では大歓迎の中に鹽竈神社を参観（6月2日）

かった。大学・専門学校史上初の台湾語教育だっただろう。創立百周年を期に、李前總統に名誉博士号を贈った日本唯一の大学だった。来校の講演は私をはじめ、少なからぬ人の悲願の一つだったが、今回の来訪が表敬訪問にとどまったのは玉に瑕とも感じられる。

藤渡理事長兼総長、小田村元総長をはじめ、学校関係者との会食の席上、渡辺学長が靖国参拝についての所見を尋ねたところ、李前總統は「父は亡くなるまで兄の死を信じなかった。父の代わりに靖国詣でをしたのだ」と心情



山形では齋藤弘知事も同行して山寺を参観（6月3日）

を語り、眼鏡を外して涙を拭いた。

同座でもらい泣きをした者は少なくない。その時、私の脳裡に去来したのは「九段の母」の歌詞であった。

会食後、本館ロビーで待っている台

待合室での李登輝現象

本会常務理事・医師 林 建良



李登輝前總統訪日のニュースが私のいる栃木県の山村でもいちばんホットな話題となった。同じ台湾人というだけで、診療所にくる患者たちが「いつ



岩手・中尊寺で芭蕉像と記念撮影（6月4日）

湾留学生一人ひとりと握手をし、創立者・桂太郎の銅像前で記念写真を撮って学校を後にした李前總統の姿に、私は悲願達成後に去っていく古武士の姿を連想した。

来るの?」「どこに行くの?」「日光に来てくれるの?」、まるで私が李前總統のスポークスマンのように聞いている。



秋田・田沢湖畔で秋田県支部と記念撮影（6月5日）

いざ李前總統が日本に到着すると、今度は生中継ながらの情景となり、「ご様子はどう?」「奥様もお孫さんも一緒だって!」、診察してもらったり、関心が李前總統ご一行の動向に集中した。

それからの十一日間、診療所では患者たちが自分の体のことをそっちのけに、医者の方に求めるのは、李前總統ご一行の刻々の行動に関する情報のみとなった。奥の細道を訪れる時に詠んだ歌、李前總統の言葉等々が待合室でのメインテーマとなり、活発に議論さ



ホテルオークラ東京での歓迎会では台北高等学校校歌を同窓生と熱唱（6月7日）

れ、時には歓声となったりして診察室まで伝わってきた。

とりわけ関心が強かったのは、李前總統の靖国神社参拝であった。

「お兄さんが祀られているんだって!」

「えっ、台湾人も祀られているの?」

台湾の元国家元首の参拝によって、台湾人と靖国神社との関係にみなが目した。「この人は本当に日本人のころをよく理解しているのね」と、同じく戦前世代の患者たちが口をそろえた。涙ぐんで、「ありがとう」と私に



栃木県日台親善協会の歓迎会では福田富一知事（左3）らと一緒に鏡割（6月8日）

礼を言った患者もかなりいた。その「ありがとう」の言葉には、なんの説明も解釈も要らない。それは台湾人と日本人とに共通したもののだから。

帰国の日、「成田空港で暴漢に襲われた」との一報が入り、患者とスタッフ全員が驚きとともに不安に包まれた。まもなく、李前總統のご無事と、暴漢は中国人であると報じられると、みなが胸を撫で下ろした。

「日本人だったらどうしようかと思った」、この患者の言葉が日本人の率直な気持ちであろう。